

思い出の場所

作文課題

私の通った小学校から本通りに続く小さな道の途中に一ヶ所だけわずかな坂道になっている場所がある。距離にすれば2メートルか3メートルのものだろうが、勾配（こうばい）はややきつい。今はもちろんきちんと舗装してあるのだが昔はそうではなかった。そして私にはこの坂道を通るたびに思い出す光景がある。

いつものように学校から帰る私たちがその坂道に差しかけた時のことだ。私たちの目に大きな荷車を引いた一頭の馬の姿が飛びこんできた。荷車には重そうな木材が山のように積んであった。馬の隣では垢（あか）じみたシャツを着た大人の馬方（うまかた）が、どうどうと荒っぽい掛け声をかけながら馬の尻を引っぱっていた。馬はその度に懸命にもがいて坂を駆け上がろうとするのだが、もう一息のところを下に押し戻されていた。前日の雨で坂がぬかるんで足場が悪かったせいもあるのだろう、何度も同じことが続いた。

と、やにわにその馬方は舌打ちをしたかと思うと、荷台にあった角材をつかみ、その角（かど）のどがった部分で馬のひざ頭のところを思いきり殴った。ぶひひひひーん。馬は狂ったような、泣き叫ぶような悲鳴をあげ、あつという間に坂を駆け上がった。馬の大きく見開かれた目が私たちの方を見た。その血走った悲しげな目は涙

に濡れ、何かを訴えているようだった。その気配で初めて気付いたのか馬方も私たちの方をすごい目でにらんだ。私たちは怖さに思わず目を伏せた。

馬方たちはいつのまにかその場を去っていた。私たちはその後、しばらくは声も出せずにその場に立ちすくんでいた。

私たちの誰かが、荷車を後押しするように馬方に申し出ていれば、馬はあんなにひどい目に会わずにすんだかもしれないかった。しかし今川君もアキヒロも私も、とつさにそこまでの機転が利かなかったし、機転が利いていたとしても言い出す勇気まではとてもなかったろう。私たちは重い心を抱えて、のろのろとその場を後にした。誰も何も口を利かなかった。

その後すぐに日本は高度成長の時代を迎え、自動車やトラックがまたたく間に普及した。それとともにあんな荷馬車も私たちの前からすっかり姿を消した。しかしあの坂道のあの光景は馬の悲しげな大きな目と共に今でも私の心の中に残っている。

課題 「思い出の場所」を題にして、みなさんの場合の作文を書きなさい。場所は学校の砂場やプール、近くの公園のブランコ、遠足で行った場所などどんな場所でもよい。